

3 月チャブレンだより

「巣立ち」

「巣立ち（鷺の子育て）」について紹介します。

鳥の王様といわれる鷺の子育ては、卵を産むための巣作りから始まります。巣を作るのはできるだけ山奥の松の大木や断崖絶壁の岩場などです。敵に襲われるのを防ぐためです。

鷺が最初にするのは、トゲのある野イチゴや野ばらの枝で巣の形を作ることです。鷺はくちばしを血だらけにしてトゲの枝を巻きながら木の上に固定します。それが終わると今度はその上に枯れ葉を敷き詰めます。さらにその上に自分の羽毛を抜いて重ねます。そして、最後にのどの近くに生えている柔らかな産毛を抜いて敷き詰めると、ようやく卵を産むのです。生まれてきた卵は夫婦で代わる代わる温めます。餌のやり方は、他の鳥と変わったところはあまりありません。

鷺の子育てで注目したのは、ここからです。

生まれた雛（ひな）の成長に合わせて、親鳥は敷き詰めていた産毛、羽毛、枯れ草、芝の順に羽ばたきで散らし、だんだんトゲの巣に戻っていきます。親鳥は雛の成長を見守りながら、守ってやらなくても自分で跳（と）ぶ力、餌（えさ）を探す力がついたと思える日を待っているのです。雛は、トゲの枝になった巣には長く留まってはられません。餌も与えてもらえなくなるのでお腹もすいてきます。足の痛みと空腹に我慢ができなくなった雛たちは、勇気を奮って高い木の上や断崖絶壁から自分の力で大空に飛び出していくのです。これが鷺の巣立ちです。

聖書の出エジプト記19章4節には、興味深いことが記されています。

「鷺の翼に載せて」という表現です。これは、空想の世界の表現ではありません。鷺の親鳥は、実際に、自ら大きく広げた翼に、鷺のひな鳥を乗せるのです。最近の研究ですが、巣立ちを迎えた雛（ひな）を、親鷺が巣を揺り動かして巣から落とし、落ちた雛を親鷺が背中に乗せて巣に戻すという生態が報告されました。これを繰り返していくうちに、雛鷺（ひなわし）は自分の羽で羽ばたくことを覚えるというのです。

聖書にあるシナイの荒れ野は「鷺の国」と呼ばれ、旧約の詩人たちは鷺の生態を詳細に観察してこの表現を用いたのだらうと思われまふ。その場合、親鷺が雛を背に乗せて巣に戻すのは、雛が自分の羽を羽ばたかせて飛べるようになること、つまり雛の自立が目的だということです。

わたしたちの大好きなモーセ組のおともだちが、まもなく巣立ち（卒園）いたします。寂しくもありますが、おおいに喜ばしいことです。私たちは、巣立っていく子供たちが、さらにたくましく成長し、自立できるように、大きな翼を広げて、応援していきたいと思ひます。

ご卒園、おめでとうござひます！心からエールを送ります。